



空間 NPO 会報

第61号
2018年4月

発行 特定非営利活動法人 女の空間NPO
〒153-0061 東京都目黒区中目黒1-4-18-401
TEL&FAX 03-3711-5054
発行人 長沖暁子

office@space-for-women.org
http://www.space-for-women.org

定例会

- 5月6日(日)13:30~16:00
 - 6月3日(日)13:30~16:00
 - 7月1日(日)13:30~16:00
- * 日時が変更となることもありますので、ご出席の方は直前にお確かめください。

おしゃべり会



- 4月 (休会)
- 5月18日(金)19:00~21:00
「～忘れてほしゅうない～
強制不妊手術を知る」

語り手：長沖暁子

- 6月24日(日)13:30~16:00
「成年後見制度から考える
～私たちが欲しい支援 Part V」
担当：長沖、丸山

女の空間カフェ



第2&第4月曜日 14:00~21:00

- 4月 9日、23日
- 5月14日、28日
- 6月11日、25日
- 7月 9日、23日

* すべての会場は、女の空間NPO事務所です。

* 予約は必要ありませんが、初めていらっしゃる方はメールでご連絡願います。
office@space-for-women.org

* 詳細は最終ページ、またはwebサイトをご参照ください。
http://www.space-for-women.org

定年女子 ジャスト1年前

木下 禮子

ついに、ついに、定年だあーって、私はどんな気持ちで来年の今日を迎えるのだろうか？

ところで他の人はどうしているんだろう？何冊か本や雑誌の特集を読んでみた。その中で今の私に一番しっくりきたのが岸本裕紀子『定年女子』集英社文庫だ。「取材を終えての発見は、60歳以降も仕事を続けている女性の多さであった。」やっぱりそうか。今まで目の前のことをこなすのに精一杯で、1週間があっという間に過ぎていく日々を続けてきたから、それがいきなり無くなるのは、ちょっとと怖い。ほら、高速道路から一般道に降りる時にスピードダウンが十分ではなくて出口のカーブで事故るんじゃないかという不安。あれに似ている。だから仕事はゼロにはしない。けれども現在のままというのは、もう無理。できれば半分にしたい。

「本書ではあえて、老後に備えての断捨離的発想や「人生の店じまい」的な考え方から、距離を置くことを提案する。仕事をリタイアすることは、人生からのフェイドアウトではないからだ。もちろん、快適な暮らしを営むための住まいの片付けは必要だろう。しかし、人間関係や、好奇心、行動半径、消費などまでも整理し、小さく畳んでしまうなんてつまらない。むしろ、人生を広げるくらいの発想でいいのではないだろうか。」そだねー。私の私らしさは好奇心旺盛なことである。仕事優先で動いてきた。定年になったら〇〇させてあげるから今はガマンと自分に言い聞かせてきた。時間切れ・エネルギー切れでできなかった様々なことをやってみる余裕を手に入れることだと思う。訪ねたい風景がある。会いたい人がいる。見たかった映画、仏像。何より丁寧な日常生活。

「定年とは、組織の一員から「個」の自分に帰ることである。」そのための準備を今日からスタートします。

おしゃべり会報告



1月21日(日) 13:30~16:00

『少し息継ぎ、でも楽ではないです、
シェアハウス。』

語り手：奥山たえこさん

一口に「シェアハウス」と言ってもいろいろあるが、今回紹介されたお話は福祉ではなく、ビジネスとして考えるとしたら、ぎりぎりの不動産経営をしているといえるのではないだろうか。こんなに身を削ってまで賃借人たちの日々の「住」に関わる仕事をするのは大変だ。私のイメージしていたのは友人とのルームシェアのようなものだったのかもしれない。「とにかくやってみる」という行動力、実行力はスゴイ。ご自分は都内でお風呂のない家に住み続けていながら、千葉までシェアハウスの風呂掃除に行かれている。意志と体力がスゴイ。そういう頑張っている人たちのためのシェアハウスをやりたいと思った。(K. A)

「儲かりはしない。けれど持ち出ししなくてもやっていけますというモデルを作りたいかった。そうでないと、誰も後に続いていかない、広がっていかないから。」福祉ではなく事業として成立することって大事な視点だと思った。

私がひとり暮らしを始めた頃はアパートを借りるしか他に選択肢がなかった。当時はシェアハウスなんていう言葉を聞いたこともなかった。けれども1週間に1回しか使わない洗濯機はもったいないなあと思っていた。マレーシアに旅した時にYWCAに泊まろうとしたら、シェアかオキュパイかと聞かれてシェアを選択した。人によって合う／合わないがあるからこそ選択肢が広がることはいい事だと思う。

所有しなくても利用できればいいものって住まい以外にも実は色々あるのではないかな。今、一番切実なのは会報印刷用の印刷機(リソグラフ)です。どなたか情報をください。(禮子)

2月12日(祝) 13:30~16:00

『成年後見制度から考える

～私たちが欲しい支援 PartIV』

担当：長沖・丸山

「成年後見制度から考える～私たちが欲しい支援PartIV」では「欲しい支援を言語化しよう」と副題をつけました。

最近、信託が話題になっていますが、家族信託、民事信託、銀行信託と被後見人の財産(資産)を信託にして管理をするという方法がとりざたされています。信託をすることで、被後見人の生活を守り質の良い生活環境を作り出せるかが問われています。財産管理には齟齬がないかもしれないが、必ずしも使い勝手がいいわけではありません。

今年に入ってから成年後見制度を取り上げている週刊誌や新聞の記事が目につきます。たとえばサンデー毎日「成年後見制度の落とし穴」、週刊現代「上手に死ぬのはもっと難しい」、週刊ポスト「誰も教えてくれない逆算の老後年表」等々。

成年後見制度の見直しが進められており、今国会に「公務員資格など欠格条項を全廃」とする自公国会での法案了承(2018.3.1朝日新聞)についての報道もありました。

被後見人になると、様々な欠格条項のため就業が狭められていることが大きな問題になっていました。改善されることはよいことです。

また今国会では、遺言がない場合の故人の財産を親族で分け合う現在の相続制度が、高齢社会に合った内容に変わる。この制度改正を週刊女性自身は「妻を優遇 新相続制度」、週刊現代は「相続大改正に備えよ」と取り上げている。新聞に掲載された記事を読みながら色々な動きがあることがわかりました。

しかし私たちが欲しい支援は、私たちが言語化していかなければと思います。今回だけでは十分な言語化ができませんでしたので、次回もこのテーマでおしゃべりに花を咲かせたいと思います。

私は現在、地域で生活支援ボランティアをしています。特別養護老人施設に入所されている方を月に一度訪問しています。訪問の度に、どちらさん？という顔をされますが、こちらから話しかけてはお天気のこと、今日の服装のことなどたわいのないことをおしゃべりします。

近くにいたお年寄りから声をかけられました。「私は仕事をしたいのに仕事がない」と嘆くのです。「仕事をくださいと伝えて」と言われます。ご本人は車いすに座り一人では移動もできないのですが、「仕事が欲しい」「働かなくては」と一生懸命に訴えるのです。職員の方は、洗濯物を畳んで頂くなど、ご本人たちができることをして頂くようにしているようです。

仕事が欲しい、働かなくてはという方を見て、働くことが生きること。生きるとは働くこと。働く場所が居場所でもあったのだと教えられます。生きてきた道程では様々な出来事もあったでしょうに、今が無為に過ごしていると感じ、働いているからこそ得られる充実感が「働く」ことへの切望になっているのだと感じました。

人生の先輩たちとお会いしていると、いま、これから、どう過ごしていくのかを問われているように思います。また認知症になっても様々な制度があり、サポートされながら安全に暮らしていけるのだと知ることにもできる場です。ますます、私が欲しい支援は何かと問い続けなければならないと思うのです。
(のりこ)

私たちが望む成年後見制度を考えるにあたって、最近話題の「家族信託」について新聞記事を参照してみた。この発想のもとにも、財産を持っている人が「認知症」になるなどして、財産の管理が難しくなるという前提がある。成年後見制度との違いは、存命中に本人のこと以外にも（たとえば妻や子どもといった家族の生活費に）お金を使うことができることにある。受託者が家売ることも可能である。ある記事にあった「例」では、長男が親の財産の信託を受けることになっていて、「長男の責任は重大である」などとされている。娘たちは「嫁」に比べて遠くにいることに

なっている。（信託するような財産がある家庭というのはこれが標準なのか・・・）信託契約をして資産管理する「受託者」には、友人でもなれるのだが、だいたい近親者になるらしい。「長男が受託者に・・・」の場合が多ければ、たとえ間に銀行などの第三者が入っても、受託者＝長男の「使い込み」が公に認められる制度になりはしないかと危惧する。
(K. A)

3月21日（祝）13：30～16：00

『女性監督の映画を観て話そう PartⅣ』

私にとって大事な心に残る映画となった。女性監督ならではの作品だった。トルコ人の男性たちはどんな思いでこれを見ただろうか。監督の実体験も含まれているとか。

トルコのいなかで暮らす思春期の5人姉妹は、両親を亡くし、祖母に育てられている。そこへは、姉妹の叔父が時々訪ねて来る。最初の場面、5人と彼女たちの友達が学校の帰りに、海の浅瀬で騎馬戦をしている。男の子の肩にまたがり、兄弟（姉妹）げんかを交えながら対戦しあう様子は自由奔放で、制服がびしょびしょになりながらほほ笑ましく印象的なシーンだった。ところがこのことが近所の女性から祖母の耳にはいり、祖母から「男の首に股をこすりつけるなんて」と言われ体罰を受ける。5人はクソ色の長いワンピースを着せられ、家から出してもらえなくなる。学校さえも行かれなくなり、次第に家のまわりの壁は高くされ、窓の格子は溶接され、電話も使えない。そして花嫁修業として料理や裁縫を教えられる。外へ行く自由を奪われた生活ながらも何かちぐはぐさを感じる。ソファでじゃれあっている5人を見ていると不自由な危うい国の中にいるのに、同時に秘められた女の強さも感じる。叔父の性虐待。某所での処女検査。強制される結婚式。といった様々な抑圧の中、一番腹立たしく感じたのは、次女の初夜の後、シーツに血痕があるか息子に確かめさせ、彼女を婦人科へ連れていく義母の

姿だった。こんなにも女が女を虐げているという悲しさを感じた。

末っ子のラーナには勇気と知恵があった。でも、逃げるにはもう一つ必要なものがある。それは「協力者」。この映画を観ると協力者になりたいくなる。製作者の意図はそこにあるのかもしれない。重いテーマの映画だったが、明るい兆しのあふれる終わり方に、未来に期待して連帯していきたいと思った。

ところでとても痛快だったのは、サッカーの試合で、男たちがスタジアムへ乱入して暴力的になることから、ペナルティとして観客が女性と子どもだけに限られたシーンだ。顔にペインティングをして、自由気ままなかつこうの女たちがぎゅーと立って、ジャンプして、高い声で叫んでいる。抑圧から解放され、この一瞬にすべてを生ききっているかのように、一斉に一緒に興奮している。実際にトルコではそんな試合があるのだろうか。日本だったらペナルティは罰金ですんでしまいそう。女性だけしかスタジアムで応援できないサッカーの試合・・・あってもいいと思うなあ。
(楓)

おもしろいと同時に切なかった。処女ってそんなに大事かあ？いちいち病院に連れて行かれて処女かどうか検査されるなんて。すべての男性が良き夫になるとは限らないのね。

最後に4女と5女の2人姉妹で必死の思いで家を脱出してイスタンブールへ向かう。「都市の空気は自由にする」2人は自由になれたのだろうか？
(禮子)

女の空間NPOの趣旨に

賛同いただける方は、ご入会ください。

入会金 6,000円 年会費 6,000円

郵便振替口座 00170-0-561307

口座名 女の空間NPO



≫おしゃべり会予告≪

4月のおしゃべり会は都合によりお休みいたします。カフェでお待ちいたしております。

5月18日(金) 19:00~21:00

『～忘れてほしゅうない～

強制不妊手術を知る』

語り手：長沖暁子

最近、優生保護法下で行なわれた強制不妊手術に関する報道が行なわれています。1996年まで日本に存在した優生保護法では本人の意思に関わらず不妊手術をすることが認められていました。その背景やなぜ、今この問題がクローズアップされたのか、女たちの活動に焦点を当ててお話ししたいと思います。

6月24日(日) 13:30~16:00

『成年後見制度から考える

～私たちが欲しい支援 Part V』

担当：丸山

Part IVでは、欲しい支援を言語化しようと話し合いましたが、なかなか進みませんでした。いろいろ、どんどん、わいわいしながら語りたいと思います。初めて参加される方大歓迎です。女が欲しい支援、いま欲しい支援をおしゃべりしましょう。(丸山)

【ピンチヒッターの編集後記】

当たり前だが、長く続ければ色々なことが起きる。仕事でも会の活動でも。今月は正直ピンチです。けれどもこのNPOが無ければ決して出会わなかった女たちと知り合えたことは私の財産だと思っている。ピンチを乗り越えるタフさを持った女たちが集う「女の空間」NPOによろこそ。お気軽にお立ち寄りください。おしゃべり会への参加や投稿もお待ちしております。(木下禮子)